

公共人類学の実践に関する一考察（Ⅰ）

—兵庫県西宮神社十日戎開門神事における取り組み—

荒川 裕紀

A Study on the practice of public anthropology (1)

- Efforts of the Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony in Nishinomiya Shinto Shrine -

ARAKAWA, Hironori

Abstract

Every year on January 10th, the main gate (known as the “Great Red Gate”) at Nishinomiya Shrine in Nishinomiya City, Hyogo Prefecture, is opened at 6 AM for visitors to proceed to the main shrine. The event is known as the Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony. The first three people to arrive at the main shrine are designated *Fuku-Otoko* (lit. “Men of fortune”).

Media coverage of the event has increased from year to year, with not just local Kansai-area media but also the national television networks in Japan. Nowadays, from my discourse, this “Opening of the Gate” is not “Event” but “Ceremony or Festival” in folklore terms. From my recent studies about Nishinomiya Shinto Shrine, lots of participants of this event think this is not a normal event but “annual festival”. Therefore lots of participants would attend annually. In this report, I would like to describe about “Public Anthropology”. In Japan the terms of “Public anthropology” and “Public Folklore” are getting become popular. So that, some researchers are making efforts to become anthropologists for the public. Also in my field, Nishinomiya Shinto Shrine, there are lots of historical and cultural milestones recently. In 2004, there is the big incident around participants. After this incident, some participant and I started to organize “Association for Opening of the Gate Ceremony Preservation”. It means that the participants became the host of this festival. This is really unique case. Especially, I was also included in this group. So now this field became one of the public anthropological fields.

Key words: EBISU, Fuku-Otoko, Shinto, Shrine, Nishinomiya, Public Anthropology, Public Folklore

1. はじめに

近年、文化人類学・民俗学の分野において、調査者自らが実行主体となり調査対象に働きかけを行うことで、公共に資するとした「公共人類学・民俗学」の分野の実践が叫ばれている。本調査者が20年近く調査を続けている兵庫県西宮神社で毎年1月10日に行われる十日戎開門神事福男選びにおいても、外的な要因と内的な要因によって、近年その動きが加速している。本論考においては、大きく祭礼の形が変容した2005年から2008年の事柄に焦点を合わせ、なぜ「公共（の）人類学」が必要なのかを考察する。

2005年以降、この祭礼が大きく変容したのは、前年の2004年に当調査対象の神事において発生した「事件」が発端となった。それは、事件が起こるまでの間、神事参加に関する明確な取り決めがなされていなかったことに起因する。つまり、この「神事」が改暦・電鉄のもたらした都市化に伴って生まれた「新暦の十日戎におけるイベント」として発展したことにより、明確な祭事の主催者がいないまま行われていたことである。そのため、開門前の順番決めなどに関しては、すべて参加者に委ねられていた。

1997年から本調査者はこの神事に参加し、1998年にはじめて門前の最前列からの参与観察を実行した。その中で明らかになったのは、参加者同士の取り決めとして、門に早く来た者から順に自分の出走位置を決められるというのが暗黙の裡に成り立っていたことである¹。

1990年代後半から主にテレビの報道によって、この神事

が関西圏のみならず日本全国に知られるようになり、それに伴って参加者も増加した。しかし、神社側の増えすぎた参加者への対策は、警備員の増員にとどまり、暗黙の了解で成り立っていたスタート位置の取り決めなどについてはあくまで「参拝者の良識に任せる」との言及にとどまっていた。つまり、神社としては、開門して3番までの福男の認定はするが、開門までの段取りには関知しないというスタンスであった。むろん、増える一方の参加者の間には、暗黙の了解がエスカレートし、3日前くらいからテントを張って順番取りをする団体も現れ始めたこともあり、参加者有志が集まり、神社側と新しいルールを作るべきとの協議を行っていた。その中で、「事件」が起こったのである。

2003年より、数日前から大人数で参加し、1人の人物を有利に走らせるために先頭集団を独占することを行う団体が現れたのである。2004年には、1週間前から10名以上のグループがテントで寝起きをし、一番福を狙おうとしていたのである。そして当日本番には、「見事に」一番福をこのグループから出すこととなったが、そのグループの数名が、他の参加者への妨害を行っていたとの報道が、全国に流されたのである。インターネット掲示板を通じて批判は高まり、一番福になった参加者が数日後に称号を返上する事態にまで発展した。

この騒動の後、主に参加者の有志たちと調査者などが神社に集まり、これらの事態ならびにこれからの神事に関して協議した。結果的には、この動きが「十日戎開門神事保存会」設立へと動き出したことを前回の報告では記述した。

今回の報告は、この団体の設立以降から 2008 年の「西宮神社開門神事講社」の動きや当時の状況についての詳細を述べる。それまでは、調査者として参加していた者が、実際に祭りを運営する側に立場を置き換えての記述となる。これまでの本調査者の研究スタンスは、あくまで祭礼の中の参与観察者としてのものであった。それが、2004 年に祭りの実行者が不在であったが故に、助言者となり、更に主催者の一員へと変容した。2004 年当時はそのことを冷静に捉える余裕はなかったが、2016 年現在において考察するならば、このことは意図せずに公共に資する実践として、昨今議論されている「公共人類学」が出来る環境となったことを意味する。この論考では、公共人類学の持つ意義を述べるとともに、改めて、この神事を祭礼研究の文脈で考察したい。

2、祭礼研究史の中での本研究

これまで、人類学・社会学・民俗学・歴史学において、多種多様な祭礼に関する研究が行われてきた。伝統の継承を伴った地域の祭りや電鉄会社などの参詣のイベントから祭礼として根付いた祭り、地方自治体の主導によって生み出された祭りなど、様々な祭りがある。ここでは、主な祭礼研究を挙げ、当神事との関連を考察したい。

人類学的に研究を行った者としては、まず中村孚美が挙げられる²。1970 年代に秩父祭りを調査する中で、祭りには地域社会の持つ性格が反映されているとする視点から、一つ一つの儀礼に着目するのではなく、「祭り全体の設計と計画、実施への手順、人々の参加のしかた、祭り全体の構成のしかた」に着目し、各町内の役割について論じた。

米山俊直は京都の祇園祭³、大阪の天神祭⁴の研究の中で、中村と同じく、「祭礼から都市をみる」⁵ことを行った。高度経済成長をたどり、都市が複雑化する中で、参与観察を行いながら何か知見を得ようと考えた点では、その後の和崎春日、阿南透、そして森田三郎へと受け継がれていくこととなる。

和崎春日は、京都の大文字五山送り火の研究⁶の中で、祭りにおける他者との関係についての考察を行った。他者である参加者との思惑が拮抗し、対立が起こるが、そこをうまく許容しまとめていくのが都市の祭りであり、開放系であると主張した。

阿南透は、「時代を再現する」祭礼⁷とよんだ、時代祭（京都）、名古屋祭り、信玄公祭りを調査し、これまでの都市祭礼で論じられていた空間的な関係性（住民の連帯）を持つのではなく、時間的なアイデンティティ確認のための祭りだとし、祭りに参加する個人として考える中で、もう一つの軸が存在するとの見解を示した。

森田三郎は『祭りの文化人類学』の中で、長崎くんちにおける「ウラくんち」であるような「ウラまつり」が発生した理由について、アイデンティティの確認であると指摘⁸した。既存の祭りに対して、よりエミック的な「祭り＝アイデンティティの確認の場、欲求充足の場」として、「ウラまつり」が派生的に生み出されたと主張する。つまり、祭りの成立は、当事者がその中でアイデンティティを確認できるか否かにかかっているとしたのである。

参加者のアイデンティティ確認の欲求の充足度が小さ

くなるにつれて祭り度が低くなる。祭りはこの精神的報酬の獲得を暗示的、無意識的目標としているのであるから、結果的にこの目標を充足できないイベントは祭りではありえない。⁹

つまり、イベントとして生まれたものであっても、参加者がそこに精神的充足を見出し、アイデンティティを確認できるものであるならば「祭り」であるといえる。新暦の十日戎に端を発する、当研究の「十日戎開門神事福男選り」は、まさにイベントとして生まれたものの、そこに祭りとしての機能を兼ね備えたものである。それは、これまでの参加者の語りから、そこにアイデンティティを見出すものが多くいたことから言える。

このように、都市における祭礼研究は、1980 年代までに醸成され、当神事の研究でも触れた参加者自体のアイデンティティの確認が、祭りとして大きな要素を占めていることが主張されるようになった。

加えて、1980 年代半ばに上野千鶴子は「祭りと共同体」において¹⁰、新たな祭礼研究の地平を生み出すこととなった。これまでの祭り、特に都市祭礼の研究においては、空間的な関係性、すなわち住民同士の連帯感を高めていくための祭礼研究が主であった。いわば祭礼は、地縁・血縁・社縁の結びつきの中で存在し、それらに対しての社会的な機能の研究をしていくものであった。上野はこの 3 つの縁（地縁・血縁・社縁）を「選べない縁」と定義し、新たな祭りの視点として、それと対比する概念としての「選択縁」の存在を指摘したのである。「選択縁」は社会的な拘束性がない代わりに、「選択縁的な共同性は、断片性と部分性を免れることができず、自らの至高性を他の共同体に対して主張することが出来ない」と論じた。そして、今日の社会学がこの選択縁を重視するのは、「(社会構造の変化によって)地縁から生産の共同が失われた後は、地縁の拘束性は著しく弱まり」、「流動性が高く規模の大きな都市のオープン・コミュニティでは、選択の余地のない閉鎖的で排他的な地縁関係を、結ぶ必要も理由もない」と主張したのである。

選択縁に関連して、松平誠は都市の中で新しく創造されたイベント・祭りに注目した。松平が調査対象に選んだものは、戦後になって創り出された、関東地方における高円寺阿波踊りであった。文字通り、徳島県の阿波踊りが原型の祭りである。特徴としては「連」さえ組めば、誰もが参加可能な祭りであり、祭りが終われば連はその場からは消えてしまうことである。松平は、この祭りの輪に参加する縁こそが「選択縁」であるとしたのである。この既存の縁とは関係なく様々な選択縁がつながって出来上がる祭りを、様々な人々が参加するという意味で「合衆型」祝祭¹¹と名付けたのである。

現在では、この松平の合衆型祭礼に関しての研究が特に進められている。その中でも、特に「よさこい」系のイベント・祭りの研究が活発である。内田忠賢が調査を行ってきたよさこい祭り自体は、1954 年に高知市にて商店街の復興の祭りとしてはじめられた。その中で出し物の一つであった「鳴子踊り」が注目を集めた。歴史的な変遷の中で、音楽や踊り、踊り手のグループなどの変化があり、現在に至っている。内田はこれらの論考の中で、踊り子の構成員は毎年募集をして編成されるため、極めて流動性が高いことから、上野や松平のいう「選択縁」的な集団であると結

論付けている。よって、選択縁であるがために自主的な参加が促され、パワーダウンしないと説明する。

矢島妙子は高知市のよさこい祭りの他に、全国に広がった「よさこい」系祭りの都市民俗的な研究を行っている¹²。1992 年に札幌で「YOSAKOI ソーラン祭り」として、まず北海道にもたらされた。結果として、成功をおさめ、そこから現在全国へと広がりを見せていくきっかけとなった。

矢島はよさこいの広がりの特徴について、行政主導ではなく、個人が祭りを創ったと指摘。踊りのチームがお互い遠征し合うというネットワークが形成されていったことも特徴であると主張している。また、踊りそのものの伝播ではなく、「祭り形式」の伝播であり、ネットワークができる一方、オリジナリティの強い自分たちの祭りの創造が出来た点が広まりの要因となった。さらに、これらの組織が厳密な地域性に捉われないことで、それまで内包されなかった人々が取り込まれ、女性参加者が増加するきっかけにもなった。矢島はこの形を、都市における「新たな伝承母体」であると主張する。民俗学ではこれまで語られてこなかった、「変わる文化」に視点を置き、そこから日本の民俗をもう一度見つめ直そうとする動きである。同時に、このような「合衆型」の祝祭を見ていく中で、都市における新たな人とのつながりに目を向けようとする研究でもある。

これらの諸研究から、十日戎開門神事に照らして考えてみると、この祭りは「選択縁」によって、日本全国から集まる「合衆型」のイベントであると言えるのではないか。時間にすると 30 秒ほどのイベントではあるが、たくさんの人が集まる「祭り・神事」¹³である。今回の論考では、あくまで調査者が祭礼の主催者として関わり出した 2005 年からの 2008 年の事例の報告に重点を置くが、この特徴的な祭礼の主催者に調査者が関わっているという利を活かして、更なる調査を継続していく。今回の報告では、特に変容する中で「何が遺され、何が淘汰されたのか」について、事実を述べていく。

3、公共人類学・民俗学の今日的な意義

歴史的な意味での反省もあり、従来の民俗学・人類学では、地域活性化への課題に関して、触れることが少なかった。民俗学者が各地域の博物館の学芸員として勤めていく場合もあるが、調査者自らが率先してその地域のために動く、助言することは少ない事例に留まっていた。しかし、アメリカ民俗学においては、公共を考える民俗学は盛んであり、日本でもまちおこしに人類学者・民俗学者が加わる事例や、各人類学者が勤務する大学の学生を動員することで、祭礼の活性化に役立て、学生自身の学びとしても再考する事例の発表が、日本文化人類学会でも散見されるようになった¹⁴。

ジェームズ・ピーコックは 1997 年に人類学の現代社会との関係、社会貢献を力説し、「公共的でなければ滅亡する (public or perish)」と主張した¹⁵。人類学を、市民社会の公共領域の中で再定義し、そこに人類学的知見を使うことによって社会の連携をみようとする試みが、文化人類学者¹⁶や民俗学者¹⁷らによって、多くなされている。

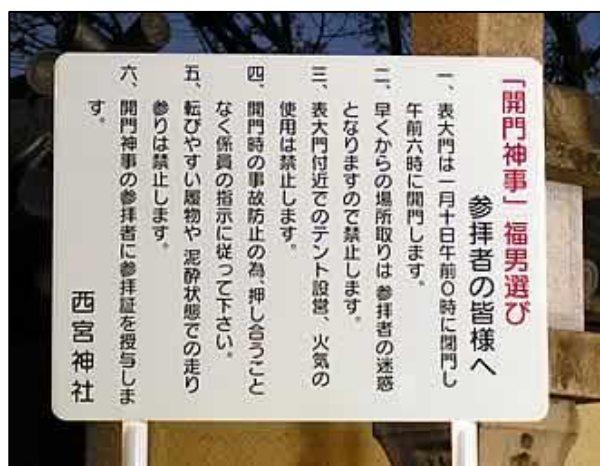
かつて世界に新しい視野を提示した文化人類学も、現在では、文化人類学調査の政治性や社会的な閉塞状態と多くの移動を生むグローバル化の中で、現代社会への知的貢献

は減少しているといってもいいかもしれない¹⁸。

こうした中で、調査地域の人々の生活に密接に関わり合うことで現地に溶け込んで人々と一緒に「祭り」を作り上げ、「社会の機能体」として作用させることで地域の発展に早い段階から直接寄与していくやり方は、現状の学問的危機を脱し、公共人類学という新たな境地に寄与することになると考えられる。まさに始まったばかりともいえる分野でもあり、まず出来ることは、事例となる民族誌の記述である。調査フィールドを大幅に変えてしまうことになりかねない手法であるが、前回の報告で行ったように、祭事に関して主催者がおらず、当時の現場を良く知るメンバーとして必然的に関わらざるを得なかったという特殊性からの記述を以降も続けていきたい。

4、2005 年の教訓

それまでの参加者たちが、初めて主催者側として機能を開始した際に、神社側から要望が挙がったのは、まずは「参加者内での混乱が起きないようにすること」であった。つまり、エスカレート化していた走る順番決めに、主催者となった保存会側に委ねるということである。そのために、多くの葛藤があった上で、くじ引きという手段がとられるようになったことは前回の報告で述べた。



写真①：赤門（表大門）前に設置された看板

後の項で詳細は述べるが、押し合いがなく、怪我をさせないために様々な方策がそれ以外にも取られた。くじ引きの当選者である 108 名を A グループとし、それ以外を B グループとすること。午前 6 時の開門の段階で A グループがまず出走し、5 秒ほどの時間差でそれ以降を出走させるというもの。A と B グループの間には、警備員と保存会のメンバーを入れて走らせた。

2005 年 1 月の時点では、まだ試行段階の感が強く、様々な問題が出た。例えば、被り物をかぶる、扮装をして出場するメンバーも多くいた。巫女の格好をした参加者が、「運良く」A グループとなり、再三の注意は喚起したものの、走り出したと同時に転倒し、出血する惨事にもなった。

このような教訓から、2006 年からは、コスプレの禁止、走り参りに自信のない参加者に対しては辞退させるように説得させること、女性に対してはこれまで怪我のあった事例について話し、それでも走る意志があるのかを確認するこ

とになったのである。

もう一点、大きな問題があった。それはくじ引きにしたことで、そのくじ引きを譲渡する人が出るかもしれないとの危惧である。A グループに当選した人には、名前を書いてもらった上で当たり札を渡し、名前の照合をすることにしていたが、これでは不十分かもしれないとのことで、2006 年には身分証での照合も行った。しかし、身分証を持たない人などへの対策もあり、2007 年の開門神事では、前の A グループに限っては神社がデジタルカメラで写真を撮り、それで出走位置に並ばせるのもどうかとの意見が出た。競争ではないが「平等を期して」の意見であったが、これを新聞数社が「福男に写真判定」という記事で扱った¹⁹。

2004 年からの「福男選び」に関する世間の注目度は、全く衰えないどころか、過熱する一方であった。



新聞記事①：スポーツニッポン（2006 年 12 月 23 日）

同時に気付かされたことは、想定はしていたことではあるが、開門後の競争への注目もさることながら、新たに加わった「くじ引き」にメディアの関心がいくようになってしまったことである。

2005 年では 500 名程度のくじ引きへの参加者が、次第に増え、2008 年の時点では 1500 名にまで達してしまった。「早くから並ばずとも午前 0 時のくじ引きさえ引けばいい」というルールが広まり、多くの人が午前 0 時前に境内に集まるようになった。くじ引きの会場は、キー局・準キー局・そして地方局も入り乱れての取材合戦の場ともなり、「1 番」のくじを引いた参加予定者に取材陣が殺到し、以降のくじ引きに支障が出る事態に陥って元参加者の保存会員が激高する場面もあった。



写真②：2007 年のくじ引き

図らずして、調査者である私自身も含めて、「伝統を創る」ことを担ってしまったのである。多くの放送当時の心境を、保存会の副会長となった H.R.氏は、以下のコメントをウェブサイト²⁰でも残している。（名前はイニシャルに変更）

「「失望」

そんな言葉が浮かんだ、今回の「福男選び」。

確かにトラブルもなく、安全に「福男選び」を終えることができた。しかしその一方で、目の前で繰り広げられたのは、私の知っている神事とはかけ離れた光景だった。

こんなのじゃない。

Z さんに憧れて参加し始めた「福男選び」。

命に代えてでも勝ちたいと思った「福男選び」。

病院の天井を眺めながら、もう一度目指した「福男選び」。

そして何としても守りたいと思った「福男選び」。

私が情熱を燃やし続けた「福男選び」とは、あまりに変わりすぎてしまった。

神事後、打ちひしがれる私に、長い付き合いの”戦友”...Y が私に言った言葉。

「H の思った通りの方向へ、福男選びは進んでいないのはわかる。でも、お前の今までの活動が、多くの人の心を動かしてきたのは事実。決して無駄じゃないと思う」。…少し、救われた気がした。（中略）」

二度と 2004 年の事件が起こらないようにとの想いで、元参加者から保存会のメンバーになった者たちは努力を重ねた。全くなにも関わらない状態からは、変化をして改善された部分も多かった。しかし、だからその伝統の変容に葛藤し、何よりもこの神事が「神事」としてではなく、「あの騒ぎを起こした福男レース」といったように、ワイドショー的に切り取られてしまうことへの葛藤があった。

いかにして、この祭礼を伝えていくのか。これは 2016 年の現在まで残された課題でもある。先述の様に、くじ引き制度をはじめて 4 年目の 2008 年 1 月にはくじ引きの参加者は 1500 名に膨れ上がっていた²¹のである。

安易にくじが引けるようになったことによって多くの人が参加し、日本全国からマスメディアが集まるようになった。認知度が高まることは嬉しい反面、いかにこの神事を伝えて、従来の形を守るのか。課題は未だ残されている。

5、2008 年からの変容

2008 年になり、兵庫県警察が「参詣客保護」の観点から動き出した。全国的にも、雑踏対策において、行政側が主導する事例が増えていた。兵庫県下では、2001 年 7 月に明石市の花火大会で将棋倒しになり死者を出す事件があったため、雑踏対策の文脈から、西宮神社へ対策の要請があったのである。具体的には、「より神事との関係が深い保存会を神社の監督下に置いて、開門も含めて催行するように」との要望であった。つまり、それまで保存会として行ってきた門開けと、拝殿にたどり着いた参加者のうち三番目までを福男として認定することに加えて、門前に並ばせる段取り決め、門を開ける²²こと、門が開いた後にいかに参詣客を誘導するのかという所まで、神社が主体的に関わるこ

が明確となった。

もちろん、これまでも、神社が雑踏の警備や開門後の警備員の配置に関しては主体となって行ってきたわけであるが、開門神事自体の一連の運営を神社が行うこと、その執行団体として保存会を神社の公認組織として認可し協働した上で、事故なく催行させることが決まった訳である。そのことによって、神社としても保存会があいまいな状態で神事に関わるのではなく、正式な神社の団体として行動してもらうことを求めだした。この保存会の間でも、参加者としての思いを断ち切れず、具体的には、くじ引きには参加して、外れたと同時に保存会の活動にシフトしようとするメンバーがいた。そういった、「マージナルなメンバー」が神事の専従スタッフとして活動するのか、参加者として、走ることのみに集中するという択一を迫られることとなった²³。

この動きの中で、氏子青年会である若戎会以外の地元の人々とも意見交換をする機会が増えることとなった。地元自治会、露天商組合、神輿奉賛講社、吉兆福栄会の方々との協議の場が持たれるようになったのである。これは、便宜的に氏子青年会に籍を置くだけでなく、神社の一組織として十日戎開門神事という行事の催行という関わり方に留まらず、西宮神社のその他の祭礼などにも関わることにつながった。



写真③：開門神事講社の設立（2008 年 12 月）

自治会や神輿奉賛講社の方々に一から説明し、地元ではないが、神事に対する想いを H.R.氏が中心となって話した。地域の住民ではなく、神事に参加していてもほとんど接点なかったこと、また、開門神事の前の順番待ちやくじ引きの際などにも近隣の住民への迷惑になっていたこともあり、初めのうちは、神社の働きかけがあったにもかかわらず、設立に関して否定的な意見も散見されたが、2008 年 12 月に各団体の協力の下で正式に開門神事講社として成立することとなった。H.R.氏は講長として、その他、開門神事の参加者で福男となった経験や、保存会にて実績のあった人物が副講長や監事などに就任した。調査者でありながら深く関与していた私は理事に任命され、その後の神事の運営に引き続き関わることとなった。全体としての特に大きな変更点は、最大の見せ場となる「開門」に直接関わるようになったことである。行政側からの強い要望²⁴もあり、2009 年 1 月より正式に開門神事講社が門を開けることも決まったのである。

6、2009 年以降の開門神事講社の動き

これまでは一参加者にしか過ぎず、そのほとんどが参詣

客とカテゴライズされる地元とはゆかりのない元福男をはじめとした団体が、まず神事の保存を訴え、それが神社をも巻き込んだ運動に発展した。2009 年以降は行政側の指導もあって、正式な講社として位置付けられるという、伝統的な祭事を起源に持つ祭事の中では、異質な発展を遂げた組織化であったと言えよう。2009 年 1 月以降は、くじ引き、開門に加え、その後の安全催行までをと、組織の受け持ちも拡大した。講社として、また他の祭事にも参加する団体として、さまざまな参加者を内包しながら活動を行っている。講社化された後の一年間の動きと、十日戎当日の動きを次に記す。

(1) 現在の講社の一年間の動き

1 月正月過ぎの日曜日

西宮神社への公式参拝、参拝後の最終打ち合わせ

9 日～10 日 十日戎開門神事

2 月初旬 氏子青年会若戎会主催の餅つきへの参加。

餅は節分時に神社から参詣客に配布される「福餅」と呼ばれる。

2 月～4 月 1 月の十日戎の総括（兵庫県警・警備会社・神社・諸団体）・総会（役員の改選、予算の審議）

6 月 「おこしや祭り」への参加

7 月 氏子青年会若戎会主催のどんじりへの参加

9 月 「西宮まつり」への参加

10 月 来年 1 月開催に関する打ち合わせ

12 月 兵庫県警・警備会社・神社・関係諸団体との翌年 1 月開催に関する打ち合わせ

興味深いことは、2009 年までとは違い、積極的に地域の祭事に各メンバーが協力していることである。おこしや祭りについては、古来よりこの祭り以降に浴衣を着ることになるという季節の変わり目の祭りであるが、ここに福男が新たに加わった。一方、「西宮まつり」は秋の例大祭であり、阪神大震災以降規模が縮小していた祭事であったが、2000 年に船渡御を入れる形で復活したものである。大手前大学や夙川短期大学、神戸女学院大学、関西学院大学など、地域の大学の学生が協力しているところにも特徴がある祭りである。



写真④：「西宮まつり」直会での福男（右端）

その祭りにも、2009 年より福男が加わるようになった。神輿・時代行列に「福男」が加わり、船渡御にも参加する。その後の直会では、地域の人々の中で、福男が紹介される。まさに、地元のヒーローとして認識される接点の場になっているのである。

(2) 十日戎当日の開門神事講社の動き

現在、どのように神事は行われているのか。2009 年から 2015 年までで、変更された点なども含めたいので、写真と併せて記載したい。

1 月 9 日 午前

境内において、チャリティーグッズの販売²⁵ (9~11 日)

9 日午後 6 時 講員集合 (南門神苑テントにて)

当日のタイムスケジュールや役割分担の確認を行う。
同時に、くじ引きに使う割り箸の本数と、くじ、場所決めの際の用紙の準備など。

9 日午後 7 時半 (南門神苑テントにて)

神社・兵庫県警・警備ならびに奉仕してもらう他団体の方々との打ち合わせ。講員内各部署のリーダー紹介。
具体的なこれからの流れに関する説明確認。

9 日午後 9 時ごろ (神社西隣西宮成田山駐車場)

先着 1500 名の待機場所である、成田山駐車場の現場確認。机などの用具の移動。マスコミへ最終的な事前説明など。

9 日午後 10 時 (神社西隣西宮成田山の駐車場)

講員総出で、県警・警備員・諸団体の協力のもと、くじ引きを引く先着 1500 名を駐車場内に誘導していく。その際に、講員による「服装チェック」が実施される。項目は、「走られる靴か (運動靴)」「走られる格好か (コスプレの禁止)」「走る体力があるか」などである。3 名ほどがこの係にあたり、参加の可否を見極める。そして、不備があった際には、中に入れずに靴などは履きかえさせる。チェックが済むと、参加承諾書用紙を渡して、郵便番号や名前を記載してもらった上で並んでもらう。この承諾書が、くじを引くための引換券となる。

9 日午後 11 時半ごろ

全ての参加希望者の駐車場内への誘導が終了。

10 日 午前 0 時



写真⑤: 当選者受付(2015 年)左が A ブロックの受付

くじ引き開始。午後 10 時から配布をした参加承諾書と引き換えに、くじ引きをする。アタリの色は赤と青の 2 色。赤の場合は A (前方) ブロックとなる。A ブロックの当選者は、全員が引き終わるまで神苑内に待機。各当たりくじには番号が振っており、その番号順でスタート位置を決める。青の場合は B (後方) ブロック。番号が振っており、午前 3 時から赤門前にて、番号順に好きな場所に順次座って貰ってもらう。無地のくじははずれくじであり、C ブロックよりのスタートとなる。門から離れた位置からのスタートとなるにも関わらず、2015 年度には 5000 人近い人たちが並んだ。全員がくじを引き終わるのが午前 1 時ごろ。終了後 A ブロック当選者への場所決めを行う。番号の若い順から、好きな場所を紙の上で選ん

でいく。ちなみに、1 列 12 名、9 列あるので、最大 108 名が A ブロックには並ぶことになる。当神事の簡単な歴史の変遷と意義を講長が参加者に話した上で、4 時まで一旦解散させる。

10 日 午前 3 時

B ブロック当選者を集合させる。B ブロック当選者は、当選札 (A,B ともに当たりくじと交換の上、配布)、と当選した際の受付での署名をもとに確認している。番号順に好きな場所を選んで座れるというやり方を探っている。B ブロックの入場が終わると、講員がチョークにて A ブロックの座る位置のマス目を書いていく。



写真⑥: マス目を書き終えて、開門神事講社の集合写真

10 日 午前 4 時



写真⑦: A と B ブロックの間での講員による説明

A ブロック当選者入場。A ブロック当選者は、ハンコを手押されておられ、それと当選券、当選受付時の署名をもとに確認している。右写真で副講長と警備員が立っているところが、A ブロックと B ブロックとの境目。ここで、講長、副講長からのこれからのタイムスケジュール、由来などについての話。2012 年からは、参加者に「黄色い手袋」をはめてもらって、それがメディアに映ることによって震災復興への応援をしていきたいとの話も行った。この後、ウォーミングアップのため、再度解散。参加者は待機したままでも良いし、ウォーミングアップに行くのも構わない自由な時間となる。境内では、精進潔斎をした神職によって「忌籠祭」が執り行われている。C ブロックは門前より曲がったところに待機。数の上で一番多いのが、このブロックである。講員や各団体の協力者とともに、警備員・県警²⁶も多く張り付いている。

10 日午前 5 時ごろ

ウォーミングアップを終えた参加者達が戻ってきて、再度の集合。そして 5 時半より、神社側からの安全を祈念してお祓いが行われる。門の裏側では、開門担当の講員によって、シミュレーションが行われる。設立当初は講員のみが開けていたが、数年を経て、元福男も含めて開けてもらうことになった。境内には、各報道機関のカメラが設置されている。



写真⑧：開門直前の予行演習。左端が H.R 氏

10 日午前 6 時

開門。かんぬきは、半分ほど抜いておく。H.R 氏の「開門」の発声で、門を押さえていた講員と元福男たちは、一斉に「逃げる」。門は、外からの圧力によって、すぐに開く。この引継ぎは、以前門を開けていた露天商組合の方から教えてもらったことである。脚力のある人物（元福男になることが多い）が真ん中を押さえ、一番長い距離を逃げるようにしている。A と B の間には講員と協力者によって「人の鎖」が作られる。開門と同時に将棋倒しにならないように、スピードを落としながら、進めていく。AB ブロックが無事に門を通過し約 50 メートル先の第 1 コーナーあたりにまで差し掛かっていることが確認できると、その旨を C ブロックに伝える²⁷。すると警備員に誘導され、C ブロックが入場。5000 名から 6000 名という大人数であるため、この人数がすべて門を通過するまでには 5 分近くかかる。C ブロックでも、門を見た瞬間に表情が一変し、駆け出す人も多くいる。そして、初めに拝殿にたどり着いた 3 名を神職が抱きかかえる。歴史的変遷から考えると、初めのころは拝殿の右側から走りこんで、鈴紐をつかむ形であり、真ん中の紐をとったものが「一番福」であった。それが、1985 年あたりに進入ルート変更。紐は 3 本だったが、1998 年に鈴縄も 1 つに統一された。現在では縄を廃止し、神職が一番から三番を抱きかかえられる（選ぶ）形へと変化を遂げていった。そして昇殿し、3 名は正式に福男として認められる。

10 日午前 6 時 15 分ごろ

境内に置かれている救護所に連絡。各方面からのけが人の有無などの確認。ちなみに、2015 年では 0 名であった。その後社務所に入り、各協力者へのお礼と同時に総括。

10 日午前 8 時ごろ

南門神苑のテント内の私物の撤収などを行う。引き続き講長は、11 日までチャリティーグッズの販売を行う。グッズ販売の売り上げは、神戸新聞厚生事業団を通じて、東北地方の震災復興に使われる（2012 年度以降）。

1 年間の流れと同時に、開門神事の 1 日の動静について、説明をした。2005 年に初めて行ったところと比べると、行政の指導があったことも大きい。様々な組織からの支援を得られることになり、2016 年現在では 10 年前よりもスムーズな運営が可能となっている。地元の方々や氏子青年会、神職との関係が生まれたことも、大いに意義があった。神事以外では接点のなかった参加者同士が、神事の主催者として協働して機能するようになる興味深い事例となっている。もちろん 2009 年から現在に至るまでも大きな葛藤が多数あり、それを超克してきた。この辺りは、次回以降の報告でしていきたい。

7. 考察とこれからの展望

今回は、祭礼研究全体における、本研究の位置や、公共人類学の現在について述べたが、主には 2005 年から開門神事講社設立、そして、その過程を経た上での現在の祭礼の実施形態についての報告となった。現在では、北九州高専の現役生に卒業生、さらに明石高専の学生や教員がこの神事の催行に関わっている。本研究における公共人類学の諸言説に対応した言及は、次回以降の報告にしたい。

今回の報告では、2004 年に開門神事保存会が既存の氏子青年会の下部組織として設立し、その途上で起こった諸問題について述べた。会長となり、2008 年の 12 月からは開門神事講社の講長となった H.R 氏のウェブサイトにあるように、2004 年より前の形での開門神事は行えなくなった。そのことはこれまで参加していた元参加者からすると、不満が残る保存の仕方であったと言えるだろう。しかし、2004 年の事件は、地域の祭りとしての存在ではもはやなくなってきていることを社会に示したのである。当たり札の譲渡を防ぐための方策の話が 2006 年末の新聞の社会面に載ってしまう注目度を、この神事が持ってしまった。

関西のみならず全国的に有名となった「イベント」を、いかにして、神事として伝えていくのか。その中で、残すもの（強調するもの）と淘汰するものが現れたのもこの 4 年間であった。例えば、「神事」であるメッセージ性が、神社から発せられるようになったことは確かである。参加者の安全を祈念してお祓いは、2005 年以前はなかったものである。いわば「創られた伝統」であるともいえるが、このお祓いが行われることによって、福つかみ競争といった雰囲気感覚的に少し弱まった。一方、参加に関する自由度はかなり淘汰された。走る順番は選べなくなり、安全面の観点から、参加に関しては服装や靴についての制限が加えられた。2008 年まではあくまで保存会が自主的に行っていたものが、2009 年以降はその制限に関しては「安全上の理由」から、兵庫県警の立会も行われることとなった。催行側としては、秩序が保たれることになったが、祭りの持つ自由度に関しては疑問符が付くこととなったであろう。祭礼研究での「選択縁」として、この神事には多くの参加者、特に 2016 年には 6000 名もの参加者がいたが、彼らが果たしてこの神事に「祭り」を感じているのか。参加者の中で、主催者として祭りを支えるようになっていく人が出てくるのか。「選択縁」「合衆性」「公共」様々な文脈でこの神事（祭り）は捉えられる。さらにこの数年で、北九州と明石の高専の学生たちが卒業生も含めてこの神事に参加することとなった。公共人類学の実践を学生たちと続けてい

けるまたとない機会に恵まれている。この財産を生かし、更なる研究を続けていきたい。

(2016 年 11 月 7 日 受理)

¹ 荒川裕紀「西宮神社十日戎開門神事福男選びの人類学的研究」2015、大阪大学(博士論文) pp.64 この先に来た者から順番を取るの、いつから始まったことなのか。1990 年代初頭または、「創られた伝統」が行われた、1980 年代の終わりなのか。この辺りの被調査者を増やしていく必要がある。

² 中村孚美「秩父祭り—都市の祭りの社会人類学」『季刊人類学』3 巻 4 号、社会思想社、pp.149-192 中村はその他にも、川越祭りや博多祇園山笠などの調査も行い、祭礼の人類学的なアプローチの嚆矢ともいえる。

³ 米山俊直『祇園祭—都市人類学ことはじめ』1974、中央公論社

⁴ 米山俊直『天神祭—大阪の祭礼』1979、中央公論社

⁵ 米山俊直『都市と祭りの人類学』1986、河出書房新社 pp.17-19

⁶ 和崎春日「都市の祭礼の社会人類学—左大文字をめぐる」『民族学研究』41-1、1976、pp.1-29

⁷ 阿南透『歴史を再現する』祭礼『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』26、1986、pp.23-32

⁸ 森田三郎『祭りの文化人類学』1990、世界思想社、pp.119-123

⁹ 森田前掲書 pp.122

¹⁰ 上野千鶴子「祭りと共同体」井上俊編『地域文化の社会学』1984、世界思想社、pp.45-78

¹¹ 松平誠『都市祝祭の社会学』1990、有斐閣 松平はこの後もこの合衆型の都市祝祭に関する言及をしている。矢島妙子らが研究している、よさこい系の祭礼に関して、この「合衆型」が様々な変容を遂げながらも、社会の中で受け入れられ、更なる広がりを見せていることに着目している。

¹² 矢島妙子『「よさこい系」祭りの都市民俗学』2015、岩田書院 など。様々なローカルヒーローに関する研究なども行っており、幅広く都市祭礼を捉えている。

¹³ このイベントで、「神事」の語が使われ始めたのは 1989 年であったことをこれまでの論考で指摘した。神事の語が付与されたことで生まれたともいえる、オーセンティシティについてもこれからの論考で提示していきたい。

¹⁴ 例えば、堂下恵による 2009 年の日本文化人類学会 43 回大会での「外部者参加による伝統祭事の活性化」に関する発表など。大学や NGO を拠点に活動する「実践的研究者」は、少なからず存在する。

¹⁵ 初出は第 97 回のアメリカ文化人類学会のセッション、「Defining a Public Interest Anthropology」の中で話された言葉であるという。(山下晋司「Japanese Review of Cultural Anthropology, vol.15,2014」) 私が実際に見聞したことであるが、この概念は日本の人類学会のみならず、山下やアメリカ文化人類学会での概念が韓国の人類学会にも伝わり、人類学の教員が実際に町おこしなどに関わる事例(ex,全北大学校における全州韓屋村との関わり等)などが起こっている。東アジアをつなぐ、公共人類学の実践事例をまとめていくことは、興味深い研究になっていく可能性はある。

¹⁶ 伊藤重人『文化人類学で読む日本の民俗社会』2007、有斐閣選書

¹⁷ 岩本通弥、菅豊、中村淳『民俗学の可能性を拓く「野の学問」とアカデミズム』2012、青弓社

¹⁸ 山下晋二編『文化人類学入門』2005、弘文堂 pp.3

¹⁹ この報道の発端も、2004 年 1 月の妨害事件同様、読売新聞の社会部であった。2004 年から向こう、社会問題として「好奇の目で」捉えられることが多かった。現在もその

傾向はあるが、いかに様々なものを含めながら、祭礼として確立させていくのが、当面の公共人類学としての課題になる。

²⁰ <http://leepi.milkcafe.to/anohinoasayake/h19.htm>

²¹ 2008 年の 1 月 10 日は平日であり、保存会のメンバーはそこまで多くの参加者が来ないのではないかと考えていた。しかし、くじ引きの後に門前で待機する時間が 2004 年以前よりも短くなったこと、インターネットカフェなどの施設が整ったことがあり、阪神間以外の参加者も比較的容易に市内で過ごすことが出来るようになったことが挙げられる。この予想もしない人数の増加、それに伴う午前 0 時を過ぎた時点での境内の混雑などが、開門を担当していた露天商の管理組合をして、一時は開門をしないとの話にまで発展した。マスメディアがこのくじ引きに殺到したこと、それが神社の旧習である「イゴモリ」を本来行わなければならない場所と時間であったことに他ならない。マスメディアとともに発展してきた神事であるが、「ワイドショー」として捉えだしたメディアといかに付き合っていくのかを考えさせられた年であった。

²² 特に門を開けることに關しては、県警側から強く、露天商の管理組合からの神社側に移譲することが求められた。露店商組合はこれまで、門の外で争いがあつた場合などに関して私的な部分での仲裁を担い、開門までの混乱を抑える役割を果たしてきた。2008 年の兵庫県警からの指導は、このような私的な「統制」ではなく、神社側の正式な管理運営下で行われること、そしてその維持のためには県警が 100 人以上の体制で協力するものである。これをイベントとして捉えるならば、当然の措置であると考えられる。しかし、例えば中里亮平の「祭礼によるもめごとの処理とルール—彼はなぜ殴られたのか—」『現代民俗学研究』2、2010、pp.41-56 で挙げられているように、本来は地域社会が私的に持っていたともいえる統制が、是非はともかくとして、「諸事情によって」取って代わられたことを意味する。

²³ 現在でも、この「マージナルなメンバー」は存在する。くじ引きに関しては、一切関わらせないことを行っている。つまり、くじ引きを引きたいメンバーは、くじ引きで外れた場合にのみ手伝い(開門、誘導など)が出来るという形を採っている。くじ引きをしたい多くが、足に自信がある元福男であることが多く、彼らは危険度が高い開門の仕事に就くことが多い。福男が開門するという福男選定のオーセンティシティの上でも、彼らの存在は必要不可欠である。

²⁴ 注 20 でも指摘したとおり、この「強い要望」の意図としては、開門神事講社が神事に関する一切を行うことによって、行政と神社からの明確な意思が、着実にそして均一に伝わることを意図したものであるとも言えよう。

²⁵ これは、2012 年から副次的に行われることになったものである。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の被災地へ「福」を届けようとの H.R.氏の思いから、チャリティーグッズの販売を行うこととなった。この辺りの「公共」については、今回の論考で詳しく述べたい。

²⁶ 神事に関する警備員の増強は、2005 年以降神社側によって着実に進められてきたが、兵庫県警も 2008 年の行政指導以降は雑踏対策の警視が直接指揮を執る体制になっており、警察官も多数配置されるようになった。

²⁷ この A・B ブロックの動向を見極めて、C ブロックにスタートの指示を出すのが、本調査者の任された役目である。施行当初は C の出発するタイミングが早かったり、人の鎖となる警備員が押し倒されそうになったりと、危険も多かった。現在 10 年近くこの体制で行うことによって、スムーズに催行することが出来るようになった。ただ、現在

(2005 年以降)の問題としては当選した参加者が、あらかじめ境内を走ったことがないことも多く、転倒も多い。